

図書館だより

第6巻1号

通巻89号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

インドネシア大学の図書館にて	山根 対助	1	新着資料—ドイツ連邦議会議事録について	山本 佐門	6
法律の勉強と図書館	小山 昇	2	新着資料案内		7
送迎の時節	欧 龍雲	3	受入雑誌		11
図書館を利用して	信太 睦美	3	古典の窓・スペシャル		
文献検索法VI		4	—アマデウスの冥想(第1回)—		12
ラブレターを書くために	午来 信子	6			

インドネシア大学の図書室にて

教養部教授 山根 対助

インドネシア大学文学部は、法学部とともにジャカルタの東南の郊外にある。文学部では各学科ごとに図書室があり、図書を集中管理するシステムをとっていない。日本研究科の図書はすべて日本から寄贈されたものであるが、日本の高校程度の蔵書量はあると思われた。政治、経済などの書もあるが、中心は歴史と文学であり、なかに国史大系、日本古典文学大系、明治文学全集、日本庶民生活史料集成などという日本研究のための専門的な基礎資料も含まれているが、これらを利用している者はほとんどいない。学生の日本語力が低く、教官の問題関心が狭く、これらの文献を読みこなす水準に達していないのである。

その、ふつうの日本人でも読めないような高度な専門書をながめていると、十五年前にこの大学が日本研究科を設置したころ、それにかかわりを持ち、助言した日本人学者の理想というか、願望というか、その思いが甦ってくるようであった。いつの日か、これらを自在に活用して本国の学問水準にならぶ研究者の出現を夢みたのであろう。それは悲しいまでの善意であったが、むなしく埃に埋れてそれがひとりよがりの自己満足にすぎなかったことを示しているのがあった。最も必要な

文献はもっと読みやすい、より基礎的な書物なのである。

しかし、その図書館でもに日本語の勉強をしている学生の素質そのものは悪くはなかった、と思っている。学生の多くは上流階級の娘たちで、結婚とともに勉強をやめるものも多いようであり、むなしくなることもあったけれど、あたえられた状況で全力をつくすほかはなく、私は畑に一粒の麦をまく思いで学生の指導にあたった。

ある日、図書室で卒業論文の指導をしていたとき、一団の日本人がどやどやと入ってきた。千葉県図書館関係の中学校の先生たちであった。そのうちひとりが並んで坐っていた私たちに近づき、まず学生に「たいへんですね。ご苦労さまです」。それから私に「日本語を勉強して何年になるのですか？」——。たしかに彼女は一見日本人ふうの美女であり、私は色黒くインドネシア人のように見えるだろうが……ややぶぜんたる気分ではあった。後日、その学生は何度となく友だちにこのことを語り、嬉しくてたまらぬふうであった。(やまね・たいすけ 国文学I：昭和57年～58年インドネシア大学客員教授)

法律の勉強と図書館

——とくに、新入生に——

法学部教授 小山 昇

諸君は毎日教室と図書館を往復すれば書物を所有しなくても試験の成績を高めることができるはずである。教室では講義があり、図書館には六法全書・辞典・法学辞典・教科書・参考書が大小いろいろ揃っているからである。どれも諸君が手で引き出すことができる。

法律の勉強は法的な物の考え方ができるようになれば卒業である。自動車が互に衝突した。乗客が負傷した。その損害を何者が負担すべきか。この「べきか」に答える筋道をたてるのが法的な物の考え方である。これは一例に過ぎない。多くの場合、法律の条文の複雑な組合せが答えを用意している。だが、諸君は、各条文を理解するのに困難を覚えるであろうし、複雑な仕組のからくりもよく解らないであろう。

これを整理して解説するのが入門書であり教科書である。ところが諸君はこれを読むのに困難を覚える。語と句と文脈に馴れていないものがあるからである。「時効」「遺留分」、「期限ノ利益」、「私権ハ公共ノ福祉ニ遵フ」など。馴れることはしかし困難でない。基本の意味を理解することはたしかにかならずしも楽ではない。基本の意味を説明する文章自体がかならずしも解りやすすくないからである。この場合には、同じ語句について、別の辞典、別の教科書を見て別の説明のしかたを読むとよい。また、教科書などの中の別の箇所での使用法に注意するとよい。つまり、その語句について書いてあることを繰り返して読むことである。繰り返しは積み重ねである。これによって馴れる。馴れるは理解を深める。これは時間がかかることである。逆にいうと、時間さえかければ法的な物の考え方がわかってくる。辛抱が重要である。

法律の条文がすなわち法であるというわけではない。条文は法を文章の形で表現している。つまり条文は法の表現形式である。だから、講義・辞典・教科書の中に法律の条文が引用されていることが多い。その条文はほとんどすべて小六法また

は大六法の中に見つけることができる。見つけたらかならず読む。そして意味を理解するよう努める。解らなかつたら辞典・教科書を参照する。条文の意味が解ったら、条文が定めていることがどこまで通用するのかの限界を考える。法の単語(概念)の意味についても同様である。これはたいへんに重要なことである。法を示す文章の意味の限界範囲を画する作業は論理を基礎とする。法律の勉強には論理の素養が不可欠である。論理の素養は本来あるていど人間に生来そなわっているものであるが、これを講義、辞典、書物またはみずから思考することによって確かなものにする必要がある。論理学の書物も図書館にある。

以上は、初学者が法律の勉強をする第一歩として絶対に必要である。この勉強の基礎がないと法社会学その他の法に関係する他の学問を理解するのに十分でない。この第一歩は時間のかかる第一歩である。だが、時間さえかければよい第一歩である。上に述べた作業を種々のテーマにつき繰り返し返しているうちに、講義を正確にノートできるようになり、ノートしたところを理解する力がつき、教科書を理解して読むスピードも早くなる。そうすると勉強にゆとりが出てくる。そのときは、判例演習室に、山ほどある判例集が諸君に読まれるのを待っている。

ローマは一日にして成らず。勉強は、三度三度、一日一日の食事のように、途中で欠けることなく繰り返さないと、血肉にならない。諸君。教室と図書館とを継続して往復するならば、金を使わずに、卒業できるであろう。それに耐えられるか否かは諸君の精神力にかかる。精神一到何事か成らざらん(朱熹)。継続は力なり(ゲエテ)。

(こやま・のぼる 民事訴訟法第1)

送迎の時節

法学部教授 欧 龍 雲

大学人にとって多忙を極める年度の終りや、初めのときがまた巡ってきた。無事に学業を終えて巣立つ卒業生を送り、感傷に浸る間もなく、次に新鮮な力を注ぎ込んで、大学の生命を活発化しなければならない課業が残されている。これらは大学にとって最も重要な行事であり、その他の行事は、言わばこれらを予期したとおりに達成するための布石である、といっても過言ではあるまい。このような大学における位置付けもさることながら、大学に学ぶ者にとっても、それぞれ、その人生における大きな節目たる意義を失わないであろう。

立志伝中の人物には、生涯全く学校の世話に預からなかった者もないわけではないが、極く普通の現代人にとって、学校の関門は長短難易の差こそあれ、潜ってきたに違いない。されば、通常最高学府と称される大学におけるこれらの節目は、愈々、これから現実の社会の中に飛び込む最後の修業の場たらざるをえない、といえようか。され、これが最後の機会であり、しかも人生の辿り着く先を決めるものならば、十分にこれを活用するべく努め、無為に過して悔を残すことがあってよい筈がない。

ともあれ、四季の移り変りはたゆまず、年毎に営みを繰り返す。あの風雪の厳しい冬を越さなければ、やはり希望に満ちた暖かい春はやって来ないことも確かである。誰もが、常に我が世の春を謳歌できないのは自然の節理であり、苦難に堪え忍び、それを乗り越えて行かなければ、春めく歓びをかみしめることは到底期待できないであろう。

また、雪の間にそっとのぞかせた新芽にかすかな安堵を覚えながら、ひとり「春は名のみ」の早春賦を口遊み、論文を書き上げるため埃まみれになりながら通った、あの大学図書館の書庫で過した日々が、無性に懐しく憶い出される時節でもある。

(おう・りゅううん 国際私法)

図書館を利用して

信 太 睦 美

大学生生活4年間を振り返ってみて、意外に図書館を利用していただのだなと自分でも感心している。だからといって、勉強に励んでいたというのではなく、ちょっとしたことに利用したのが多かったように思われる。定期テストの前や、ゼミのレポート書きの時、それから講義のない時間の暇つぶし、友人との待ち合わせなどである。

定期テストの一週間前あたりを境として、普段はひっそりと静まりかえっている図書館も多くの学生たちでごった返している。一般にテスト勉強と称するものをしに来た学生はよく見ると2つに分かれている。真剣に勉強しに来た学生と、テストの情報を交換しに来た学生である。私はどちらかといえば後者に含まれていて、たいていあわてて来て情報をあさっていた。だから、もっと真面目に講義に出て、真剣に聞いていれば良かったとよく思ったものである。

レポート提出でも図書館にはこんな思い出がある。

学生の本業は勉強なのだから意欲をもってレポートに取りかからなければならないのに、私にとってレポートはいつも憂鬱の種だった。だからレポートを書く時間は充分にあるのにこの種が芽をふくらませて気がついた時にはあと四・五日しか残っていない。それであわてて図書館にかけ込んで文献を探すのだが、カードを見ても本棚を見てもなかなか見当たらない。一人では無理だから職員の方達と一緒に探してもらおう。そうして、見つけていただいた時は思わず感謝の気持ちで一杯となるのである。あとは、書くことに専念して図書館に通うのである。考えてみると、私の憂鬱の種はどうも本探しであつたらしい。しかし、それももう卒業と同時になくなってしまう。良いことか悪いことかわからないけれど、なんとなく名残り惜しい気がする。

さりげないところで図書館も、大学生生活の思い出に一役かっているのだなと思った。

(しんた・むつみ 昭和59年3月経済学部I部卒)

図書館をあなたのものに

資源・エネルギー情報の 調べ方(2) 石炭・原子力編

シリーズ

文献検索法Ⅵ 資源エネルギー編②

石油代替エネルギーの開発

エネルギーは、わたしたち人間にとって欠くことのできないものです。照明・炊事・冷暖房・交通・通信・産業など、すべてエネルギーと切り離して考えることはできません。18世紀、産業革命の頃から約200年、人間は、石炭エネルギーの利用に始まり、今日では、石油・天然ガス・原子力等、いろいろなエネルギー資源を使うようになりました。しかしながら、石油などの資源は、このままのペースで使い続けると、あと数十年で使い果してしまうといわれます。そこで、石油に代わる代替エネルギー資源の開発が、わたしたち人類にとって、もっとも重要な課題となっています。

石炭

石炭が、エネルギー資源として、大量に使われたのは、1774年に、ジェームス・ワットが石炭を燃やして動力を得る蒸気機関の実用化に成功した頃からです。それ以来、1950年までの約200年間にわたって、石炭は、世界のエネルギーの主役でした。しかし、30年ほど前から、値段が安くて、使い易い石油に、その座を譲ってきました。

しかし、最近になると、エネルギーの需要はますます増える一方、石油の埋蔵量に限界がみえ始め、産油国による石油産出量の制限、石油価格の上昇などで、まだ、現在の消費量が続くとしたら、約200年分位の埋蔵量をもつ石炭が、再び注目されてきています。

○世界の石炭の埋蔵量と産出高は？

「国連世界統計年鑑1979/80年版〔分類350.9
番号Se22〕」所載の表、～石炭—資源量および生産高～(196p.)をみると、世界63ヶ国または地域別の資源総量、うち経済的価値のある埋蔵量さらに、うち採掘可能量があり、1970、1975～1978年の生産高が示されています。また、「エネルギー生産・需給統計

年報(石油・石炭)昭和57年版」(通商産業省)〔^{501.6}_{E59}〕所載の表、～輸入炭入着～(170p.)をみると、原料炭、一般炭、無煙炭の別に、昭56～58年3月までの月毎、輸入先別の入着炭量の推移が示されています。

○日本では、どれ位、石炭の生産が行なわれているか？

前掲、「エネルギー生産・需給統計年報」所載の表、～1.石炭生産1.生産推移～(124p.)をみると、石炭の全国生産高と、北海道、本州、九州の地域別生産統計があり、昭48～57年の間、累年順に年度間稼働炭鉱数、原料炭、一般炭、無煙炭別の生産高、従業員数、出勤率、稼働率、能率、操業日数、平均発熱量、日産量などの石炭生産に関わる数値が示されています。また「コール・ノート1981年版」(資源エネルギー庁石炭部)〔⁵⁶⁷_{C81}〕開発研究所〕所載の表、～日本の石炭産業の推移～をみると、1945～1980年の炭鉱数、生産量、労務者数、労働生産性(出炭能率)が、グラフで示されています。

○国内での石炭の使われ方は？

前掲、「エネルギー生産、需給統計年報」所載の表、～5.石炭需給1.需給推移～(146,7p.)をみると、石炭需給、国内炭積出・販売という項目の次に、高炉による製鉄、9電力、その他の電力、コークスなど産業・用途の12種別に、昭48～57年の石炭の需要を示しています。

○世界的にみて、日本の石炭の自給・輸入依存度はどの位か？

「国連エネルギー統計年鑑 Yearbook of World Energy Statistics 1980」〔^{501.6}_{Ko51}〕開発研〕所載の表、～Table14, Production, Trade and Consumption of Hard Coal—石炭の生産、取引及び消費～(247～259p.)をみると、亜炭(一般炭)、褐炭、泥炭、コークス(Table15～19, 260～292p.)を除く無煙炭について、国際経済組織、地域(5)、国(107)別に分け、1976～1980年の石炭の生産、輸出入、在庫変化、国民1人当たり消費量が示されています。また、Table20, World Movement of Hard Coal 1976～1979—石炭の世界動向—(293～300p.)をみると、石炭の輸出国(22)と輸入国(45)のマトリックス(表)となっているので、日本がどの国から主に輸入しているか、あるいは、カナダ産石炭は主にどの国に輸出されているか、

また、日本の自給、輸入依存度などを知ることができます。

回原子力

原子力エネルギーの将来

1980年度の日本のエネルギー資源は、66%を輸入石油に頼り、原子力発電による供給は、現在5%位です。また、発電用エネルギーの40%を石油が、20%—天然ガス、12%—原子力、10%—水力・石炭が占めています。1990年には、予測として、総発電力の中に占める石油の比率は、およそ10%ほど少なくなり、この減少分を代替するのが、原子力などの開発途上にある各種の発電システムと考えられています。

○原子力の果している役割とこれからの開発について知るには？

「世界のエネルギー展望 World Energy Outlook 1983 OECD/IEA (経済協力開発機構/国際エネルギー機関) [開発研] 所載の表、～原子力開発見通しの推移～(422p.)では、これまでの原子力開発の推移と、原子力発電の現状と見通しについて、詳しく分析しています。原子力発電の現状については、OECD諸国の原子炉発注件数、燃料別発電々力量についての表があり、原子力発電の見通しについては、1981年末における各国の原子力開発計画の状況、原子力発電規模、共産圏諸国の原子力発電の1980～1990年の将来見通し(原資料; OECD/NEA「原子力および核燃料サイクル:2025年までの見通し)の表などがあります。

○世界のウラン資源の埋蔵量と生産、需要および見通しについて知るには？

前掲、「世界のエネルギー展望」所載の表、～自由世界のウラン資源～(434p.) (原資料; 「ウラン資源埋蔵量、生産、需要」 OECD/NEA/IAEA=国際原子力機関)によって、世界のウラン資源の埋蔵量を知ることができます。また、同統計は「総合エネルギー統計」(資源エネルギー庁)〔^{501.6}Sh29開発研〕にも載っています。さらに、世界のウラン生産量および生産見通し(438p.)の表により、1977～1980年のウラン生産量を、産出国(17)別に知ることができます。また、ウランの需要、生産高の見通しについては、2000年までの予測グラフがあります。その他にも、最近問題になっている使用済燃料(核廃棄物)の2000年までの累積発生量および

貯蔵施設の計画容量についての予測グラフ(442p.)があります。

○原子力発電について知るには？

「電源開発の概要—その計画と基礎資料—昭和57年版」(資源エネルギー庁公益事業部)〔^{540.921}Ts91〕所載の表～原子力発電所の運動・建設状況(電気事業用)(436～439p.)、原子力発電所位置図(440p.)～をみると、日本の原子力発電所の設置状況がわかります。また、「21世紀へのエネルギー需給展望—長期エネルギー需給見通しの改定とエネルギー政策の総点検—昭和59年刊」(通商産業省編)〔開発研〕の第5章エネルギー関係参考資料にも、原子力発電所立地図(165p.)があります。

また、当資料168p.には、我が国原子力発電所の設備利用率(168-9p.)、世界の原子力発電設備の状況(原資料; 日本原子力産業会議発行原子力発電所一覽表)(166, 7p.)についての表があります。

さらに詳しく知るには、「石油代替エネルギー便覧昭和57年版」(資源エネルギー庁編)〔^{501.6}Sh29開発研〕の158～163p.をみると、核燃料サイクル図、原子力発電の略図、昭和65年度の電源開発及び電力供給目標、電源別発電原価、主要国の発電用燃料構成などの表が大変便利です。

その他主要な所蔵石炭・原子力エネルギー関連資料の紹介

原子力白書 原子力委員会〔^{429.02}G34工学部〕
 原子力年鑑 日本原子力産業会議〔^{429.059}G34工〕
 エネルギー'81 通商産業省〔^{501.6}Ts91開発研〕
 日本の資源 科学技術庁〔^{602.91}Ka16開発研〕
 国民生活と資源エネルギーハンドブック
 経企庁〔^{501.6}Ko48〕
 '83市民のエネルギー白書 経済評論増刊号
 日本の統計昭58年 総理府〔³⁵¹So55〕
 国際統計要覧昭58年版 総理府〔^{350.9}So55〕
 日本のエネルギー問題 日本科学者会議〔^{501.6}N77〕
 日本国勢図会1983年版 矢野恒太記念会〔^{B51}Y58〕
 エネルギー産業界 教育社産業界シリーズ〔⁰⁸¹Ky4開発研〕
 産業用燃料—石炭の可能性 OECD/IEA〔^{575.3}O71開発研〕
 北海道エネルギー概況昭和58年版 北海道〔^{501.6}H82〕
 北海道通商産業統計年鑑昭58年 札幌通商産業局〔^{330.59}H82〕

(閲覧係)

—ラブレターを書くために—

午 来 信 子

「試験の答案は教師に対するラブレターである」この言葉を聞いたのは3年生でした。人事異動があった年で、精神的に不安定で、動揺することが多かったけれど“決断の時”がきたのだ、と自分にいいかけながら過した時期でした。職場環境が変わったことで緊張し、疲労がたまったのでしよう、大学に来ると一講次目も、二講次目も、よく眠ってしまった。目をさまして教科書のどこをやっているのかわからない、そうすると“今〇〇ページをやっていますが、ここで……”という声に“あ、よかった”とページをめくり始めて“ドキ”“ぐっすり眠っていたのを見られたのかな……”と思ったことがあった。また「昔は眠っている人にチョークを投げつけたこともありましたが……」等と、こわい言葉も聞えてきて、ラブレターなる言葉が重く感じられ試験の度に思い出すことになったのです。そこで良いラブレターを書くために図書館に通った。というのと美しいのですが、試験が近ずいて、にわか勉強のためにという事が本音です。事実、時間がなくて必要に迫られなければ出向かせませんでした。

4年間を通しての図書館の感想といえますと、印象的なのは、憲法の授業で紹介された本を探した時です。目録カードで確め、閲覧用カードに記入し、カウンターの人をお願いした。その方はファイルを1～2あたった後で“不明です”と言った。軽いショック。内心“授業で紹介された本ですよ。不明なら新しい本で補充すべきでしょう”と思ったのにそのままにしてしまった。状況を話して購入希望として申し出るべきであった。がっかりするのは一人がいい。次は目録カードについて、なぜ書名カードがないのでしょうか。紙面の制限がありますので例をあげるのは止めますが、不便でした。後半は件名カードを引き随分補完できるものと思いましたが。しかし知り得た情報(書名)でストレートに引ける書名には及びません。カードは利用者と本を結びつけるものだと思います「著者のない本があっても、書名のない本はありません」このことだけをとりても存在の意義はあると思うのです。

→p.9につづく

新着資料—ドイツ連邦議会議事録について

法学部教授 山本佐門

北海学園大学図書館にまた貴重な研究資料が入った。『ドイツ連邦議会議事録』(Verhandlungen des Deutschen Bundestages)である。ドイツ連邦議会は日本の衆議院に相当する西ドイツ(ドイツ連邦共和国)の中心的議会であり、そこでの法案内容、その審議経過の解明は、極めて価値ある研究領域であろう。

本図書館に収められた資料は、連邦議会第1回会議初日(1949・9・7)から第142回会議終了日(1983・1・20)までの議事に関するものである。ドイツ連邦議会はドイツの分裂国家化とともに歩みはじめたが、この議事録によって、K・アデナウアー首相下でのドイツ復興をめざす、またW・ブランド、H・シュミット首相下13年間続いた社会民主党主導政権の、諸政策の実態について、詳細に理解しえるであろう。

この議事録は3つの部分から成り立っている。第1には討議録(Stenographische Berichte)であり、議場での質疑応答の様子が、拍手・ヤジまで含めて正確に報告されており、123巻の分量である。第2には印刷文書(Drucksachen)で、本会議提出法案、委員会報告から統計報告まで公表された種々の文書が収められており、294巻の分量である。第3には索引(Register)であり、発言者別索引(Sprechregister)と事項別索引(Sachregister)に分けられ、被選期(Wahlperiode—通常は4年)ごとにまとめられている。この索引については第7被選期(72—76年)までしか収納されていない。「議事報告」「印刷文書」ともかなりの分量であり、資料調査にあたってはこの「索引」の巻を積極的に活用することがより有益であろう。また、この資料はマイクロ・フィルムではなく、原本と同じ冊子となっていることも好都合である。本学ではこの議事録の今後の巻も継続購入の予定であり、ドイツ連邦共和国統計年報(Statistisches Jahrbuch für BRD)も備えられたこととあわせ、喜びたい。

(やまもと・さもん 政治学)

資料案内

(昭和59年1月～3月に受入整理された圖書の
うち主なものを選択して掲載してあります。)

◆ 教 養 関 係 ◆

書誌学序説 長澤規矩也著 吉川弘文館 020.1 N22

西洋における生と死の思想 泉治典〔等〕編 有斐閣 130 I 99

カント U. シュルツ著 坂部恵訳 理想社 134.2 Sc 8

ショーペンハウアー W. アーベンロート著 伴一憲訳 理想社 134.57 A 13

大学生の心理 関崎一〔等〕編 有斐閣 143.4 Se24

日本近世史一講座一 有斐閣 210.5 N77

1. 幕藩制国家の成立 (深谷克己 加藤栄一編)
2. 鎖国 (加藤栄一 山田忠雄編)
6. 天保期の政治と社会 (青木美智男 山田忠雄編)
8. 幕藩制国家の崩壊 (佐藤誠朗 河内八郎編)
9. 近世思想論 (本郷隆盛 深谷克己編)

証言日本占領史 竹前栄治著 岩波 210.76 Ta63

開拓使事業報告 3 大蔵省編 復刻版 北海道企画出版センター 211 Ka21

パリの聖月曜日 喜安朗著 平凡社 235.065 Ki84

20世紀思想家文庫 岩波 280.8 N73

1. トーマス・マン (辻邦生著)
2. チョムスキー (田中克彦著)
3. エイゼンシュテイン (篠田元著)
4. ハイデガー (木田元著)
5. ピカソ (飯田善国著)
6. ウィトゲンシュタイン (滝浦静雄著)
7. ケインズ (西部邁著)
8. 西田幾多郎 (中村雄二郎著)
9. メルロ＝ポンティ (広松渉 港道隆著)

山田秀三著作集 全4 草風館 291.1 Y19

〔大日本帝国〕の研究 フォーチュン編集部編 徳間書店 302.1 F39

東南アジア学への招待 上 矢野暢編著 日本放送出版協会 302.23 Y58

都市の文化 L. マンフォード著 生田勉訳 鹿島出版会 361.48 Mu31

都市の社会史 中村賢二郎編 ミネルヴァ書房 362 N37

北海道戦後教育史 人物編 山崎長吉著 北海道教育社 372.11 Y48

人間としての心理治療者 M.F. ワイナー著 飯長喜一郎訳 有斐閣 493.7 W55

ヨーロッパの画家たち人間のいる絵との対話 酒井忠康著 有斐閣 723 Sa29

モーツァルト A. グライター著 理想社 762.34 G84

体力測定法 松浦義行著 朝倉書店 781.9 Ma89

フランス語学習者・フランス旅行者のためのフランス語情報事典 三修社 850.7 F43

夏目漱石一講座一 有斐閣 910.28 N58

1. 漱石の人と周辺
2. 漱石の作品 上
3. " " 下
4. 漱石の時代と社会
5. 漱石の知的空間

万葉紀行 土屋文明著 筑摩書房 911.126 Ts32

虚子から虚子へ 川崎展宏著 有斐閣 911.302 Ka97

遙かなる父・虚子 高木晴子著 有斐閣 911.302 Ta29

鑑賞俳句歳時記 全4冊 有斐閣 911.307 Ka59

蕪村の世界 山下一海著 有斐閣 911.34 Y44

源氏物語の世界 3, 5～8 有斐閣 913.36 G34

ゲーテ P. ベールナー著 桜井正寅訳 940.28 B62

リンケ H.E. ホルトゥーゼン著 塚越敏〔等〕訳 940.28 H83

もう一つの武蔵野 — 田山花袋「東京の三十年」
〔日本人の自伝〕平凡社・第17巻

花袋が回想した当時の東京は「泥濘の都会」であった。そここの露地裏を歩き、すいとんの臭いをかき、幾度となく涙する少年の姿がある。

本屋の小僧として独力で英語を学び、むさぼるように西欧の文学を吸収しつつ創成期の日本文学の担い手たちと交友して行く。そこには「生きた日本文学史」がある。花袋がとりわけ親しかったのは、独歩、藤村そして柳田国男だった。とりわけ印象深いのは、武蔵野の小さい丘の家に独歩を訪ねた日である。「遠い昔だ実際夢のような気がする。」と書く花袋の目にもう一つの「武蔵野」が映っていたことだろう。

※『日本人の自伝』(平凡社)は全23巻と別巻2巻は開架コーナーにあります。(281.08 N77)

◆ 経済学部 ◆

山田盛太郎著作集1 岩波 330.8 Y19

経済理論における最適化 A.K. デイキシット著 大石泰彦
〔等〕訳 勤草出版 331.19 D79

宇野弘蔵の世界 清水正徳著 有斐閣 331.34 Sh49

資本論の読み方 山口重克著 有斐閣 331.34 Y24

国家の市場機構 真実一男著 ミネルヴァ書房
331.55 Ma99

一般経済史 長岡新吉〔等〕編著 ミネルヴァ書房
332 N18

日本経済の基礎知識 金森久雄著 中央経済社
332.1 Ka45

日本の経済発展 南亮進著 東洋経済 332.1 Mi37

1920年代の日本資本主義 1920年代史研究会編 東大出版
会 332.1 Se69

経済大国の盛衰 篠原三代平著 東洋経済 332.1 Sh67

ヨーロッパ近世経済史 1, 2 J. クーリッセル著 諸田
實〔等〕訳 332.3 Ku29

現代フランス経済論 長部重康編 有斐閣 332.35 O72

地場産業の研究 金子精次編 法律文化社 332.9 Ka53

地域分析入門 大友篤著 東洋経済 332.9 O86

地域経済の変容過程 北古賀勝幸〔等〕著 ミネルヴァ書房
332.91 ki65

木下悦二先生還暦記念論文集 有斐閣 333.6 Ki46

世界経済診断 大来佐武郎著 TBSブリタニカ
333.6 O52

南北問題の現代的構造 本多健吉編著 日本評論社
333.8 H84

現代資本主義分析と独占理論 森岡孝二著 青木書店
333.9 Mo62

開発途上国の経済学 H. ミント著 木村修三〔等〕訳
東洋経済 333.8 My

多国籍企業論 亀井正義著 ミネルヴァ書房 335.38 Ka34

景気変動と日本経済 田原昭四著 東洋経済 336 Ta19

為替リスクと国際財務戦略 村松司叙〔等〕著 有斐閣
337.7 Mu48

世界の金利日本の金利 唄野隆〔等〕著 有斐閣
338.12 B14

アメリカの金融革命 伊東政吉〔等〕編 有斐閣
338.253 I89

国際金融の理論 原正治著 嵯峨野書院 338.9 H31

円相場十年のダイナミズム 村本孜著 有斐閣
338.97 Mu49

島恭彦著作集 全6 有斐閣 340.8 Sh35

1. 財政思想史
2. 財政学原理
3. 日本財政論
4. 地域論
5. 国家独占資本主義論
6. 東洋社会論

日本財政要覧 武田隆夫〔等〕編 東大出版会
342.1 Ta59

現代西ドイツ財政論 佐藤進著 有斐閣 342.34 Sa85

解説住宅地都市問題 牛見章著 ドメス出版
365.3 U93

日本の労使関係システム 森五郎編著 日本労働協会
366.5 Mo45

現代自動車工業論 中村静治著 有斐閣 539.09 N37

地域開発政策の課題 大沼盛男〔等〕著 大明堂
602.1 O63

北海道地場産業の地域内生化に関する研究 北海道未来総
合研究所編 同編者 602.11 H82

大沼 盛男・池田 均・小田 清編著
『地域開発政策の課題——地域主体の形成を求めて』
大明堂 昭和58年4月刊

地域経済・社会の理論的、歴史的、実証的な分析は極めて複雑で構造的にもやっかいな代物である。ましてや、将来を展望しての政策論の樹立となるとなさらである。このため、多(他)分野からの接近による学際的な共同研究体制が必要不可欠なものとなる。

本書はこのような前提をふまえて、本大学の経済学部教授であられた故池田善長博士の指導を受けた、筆者を含めての研究者の共同作業としてまとめられたものである。分析対象地は北海道であるが、明治維新以降、日本資本主義の全体動向と深くかかわってきたという点では重要な研究対象地域である。このような点をふまえての本書の特徴は第3章「地域開発の計画と主体——苫小牧東部開発周辺地域の実態調査から」で示されている。それは地域計画——住民・自治体——研究者との相互関連の在り方である。

(小田 清=こだ・きよし 経済学部助教授)

◆ 法 学 関 係 ◆

比較政治社会学 D. マティ著 桜井陽三訳 芦書房 311 D81

現代政治過程論 黒川貢三郎(等)著 北樹出版 311.1 Ku74

日本の政治 京極純一著 東大出版会 312.1 Ky3

戦後政治 上, 下 升味準之輔著 東大出版会 312.1 Ma68

中国のパワー・エリート像 伊藤喜久蔵(等)著 有斐閣 312.22 I89

現代行政全集 1, 2, 12~15 ぎょうせい 317.08 G34

現代都市法の状況 五十嵐敬喜著 三省堂 318.2 I22

戦後日本外交史1 三省堂 319.1 Se64

中国をめぐる近代日本の外交 白井勝美著 筑摩書房 319.122 U95

概説アメリカ外交史 有賀貞(等)編 有斐閣 319.53 A73

林迪廣先生還暦祝賀論文集 法律文化社 320.4 H48

法学協会百年記念論文集 全3 有斐閣 320.4 H81
 1. 法一般・歴史・裁判
 2. 憲法行政法・刑事法
 3. 民事法

リーガルマインドへの挑戦 山本満雄著 有斐閣 320.7 Y31

法律論文の考え方書き方 広中俊雄(等)著 有斐閣 320.7 H71

法律学全集 12-I 新版 警察法 有斐閣 320.8 H89

基本法学一岩波講座一 3, 4 岩波 320.8 Ki17

法実証主義論争 深田三徳著 法律文化社 321.1 F71

日本人の法観念 大木雅夫著 東大出版会 321.3 O51

国民主権と国民代表制 杉原泰雄著 有斐閣 323.01 Su34

小森義峯先生還暦記念論文集 嵯峨野書院 323.04 Ko67

演習憲法 芦部信喜著 有斐閣 323.4 A92

現代憲法大系1 法律文化社 323.4 G34

憲法のはなし 長谷川正安著 日本評論社 323.4 H36

憲法第9条 有斐閣編 323.4 Y96

日本土地私有制の展開 熊谷開作著 ミネルヴァ書院 323.98 Ku33

演習親族相続法 泉久雄著 有斐閣 324.6 I99

自習商法教室 鴻常夫(等)著 有斐閣 325.01 O86

改正会社法詳説 堀口亘(等)編 三嶺書房 325.2 H88

改正会社法解説 竹内昭夫著 新版 有斐閣 325.2 Ta67

手形法・小切手法入門 前田庸著 有斐閣 325.61 Me26

演習刑法 阿部純二(等)著 有斐閣 326.01 A12

井上正治博士還暦祝賀(記念)論文集 有斐閣 326.04 I57

判例刑法研究 有斐閣 326.098 H29
 2. 違法性
 4. 未遂・共犯・罪数
 6. 個人法益に対する罪Ⅱ(財産犯)

教材刑法判例 小暮得雄(等)著 北大図書刊行会 326.098 Ko26

刑法総論 柏木千秋著 有斐閣 326.1 Ka77

司法のあり方と人権 芦部信喜著 東大出版会 327 A92

民事訴訟法 石川明(等)著 青木書院新社 327.2 I76

演習民事訴訟法 鈴木正裕(等)著 有斐閣 327.2 Su96

基本判例から見た民事執行法 新堂幸司(等)著 有斐閣 327.3 Sh62

演習刑事訴訟法 田宮裕著 有斐閣 327.6 Ta81

寡占体制と独禁法 実方謙二著 有斐閣 328.1 Sa62

経済規制と競争政策 実方謙二著 成文堂 328.1 Sa62

独占禁止法と消費者訴訟 谷原修身著 中央経済社 328.1 Ta87

→p. 6よりつづく

最後に、法学研究等の雑誌が未製本のまま借用できることは有難いことでした。重いカバンをかかえて通学している身には感激でした。

良いラブレターを書くために努力したのですが？満足のかく答案を書くことができなかったことは残念です。しかし学生生活は楽しかった、新しい世界であり、発見が沢山ありました。

(ごらい・のぶこ 昭和59年3月法学部Ⅱ部卒)

◆工 学 関 係◆

- 都市問題の系譜 磯村英一著 東海大 318.7 I 85
- 情報処理概論 青野忠夫著 八千代出版 401.4 A 55
- 確率過程とその応用 小和田正著 実教出版
418.7 Ko95
- 計測工学 下田茂〔等〕著 コロナ社 501.22 Sh51
- 模型実験の理論と応用 江守一郎〔等〕著 技報堂
507.9 E 54
- ロボットは何をもたらすか 木上 進著 日刊工業新聞社
509.69 Ki 16
- 建設技術史 H.シュトラupp著 藤本一郎訳 鹿島出版会
510.2 St 8
- BASIC〔PC-1500〕による土木技術者のためのポケコンガ
イド 佐藤勝夫著 山海堂 510.7 Sa85
- 土木マイコンシリーズ 1, 2 近代図書 510.8 D81
- 新体系土木工学1 土木学会編 技報堂 510.8 Sh69
- 建設プロジェクトの進め方 土木学会編 510.9 D81
- 建設プロジェクトの分析と評価 土木学会編 510.9 D81
- 建設工事における注文者の責任と請負人の責任
中村絹次郎著 鹿島出版会 510.9 N37
- 土質工學用語解説集 土質工學會 511.3 D88
- 土質基礎工學ライブラリー 24 土質工學會 511.3 D88
- 海外建設工事の契約・仕様 土木学会編 513.1 D81
- 土木の見積と工程管理 佐用泰司〔等〕著 鹿島出版会
513.1 Sa99
- これだけは知っておきたい建設現場の目のつけどころ
掛井連著 鹿島出版会 513.3 Ka24
- 計量都市計画 天野光三編 丸善 519.8 A43
- 実践としての都市再開発 藤田邦昭著 学芸出版
519.8 F67
- 都市緑地計画論 丸田頼一著 丸善 519.85 Ma58
- ジュゼッペ・テッラーニ B.ゼーヴィ編 鶴沢隆訳
520.28 Z 3
- 生きものの建築 長谷川堯著 平凡社 520.4 H36
- 伊藤ていじ建築文化再見 全4 淡交社 520.8 I 89
- 新建築大系 彰国社 520.8 Sh64
8. 自然環境
17. 都市設計
41. コンクリート系構造の設計
- 趣味の構造力学 武藤清〔等〕著 市ヶ谷出版会
524.1 Mu93
- 図解木造建築図面の見方・かき方 尾上孝一著 オーム社
524.5 O67
- 新しい耐震設計入門 福岡正巳編 近代図書
524.91 F82
- 地震と建築 久田俊彦著 改訂版 鹿島出版会
524.91 H76
- 地震動のスペクトル解析入門 大崎順彦著 鹿島出版会
524.91 O73
- 実務家のための建築物の耐震設計法 大崎順彦編
524.91 O73
- 建物の火災と安全のはなし 牟田紀一郎著 鹿島出版会
524.94 Mu91
- 光・熱・音・水・空気のデザイン 彰国社編
525.1 Sh96
- マイコンによる建築計画の作り方 渡辺仁史著 鹿島出版
会 525.1 W46
- パソコンによる建築グラフィックス1 渡辺仁史著
培風館 525.1 W46
- これだけは知っておきたい防水工事の知識 伊藤健二〔等〕
著 鹿島出版会 525.55 I 89
- マンションのメンテナンス(修繕) 藤木良明著
住宅新報社 525.8 F62
- 建築基準法50講 遠藤浩〔等〕編 第3版 有斐閣
525.9 E59
- ハンドメイド・ハウス 藤門弘著 山と溪谷社
527.1 F58
- 現代住宅の地方性 住田昌二編著 勁草書房
527.1 Su65
- 分譲マンションのすべて 小林清周著 鹿島出版会
527.8 Ko12
- 建築設備 小笠原祥五〔等〕著 市ヶ谷出版 528.01 O22
- 給排水設備の設計法 大庭孝雄著 学芸出版
528.1 O11

受入雑誌

(昭和59年1月～昭和59年3月現在)

赤旗(復刻版)：新日本出版刊，昭58年1月，1-187，号外1-13，東京地方版1-16：昭3-昭10

文学評論(復刻版) 1-3(1-31)：昭9年3月～昭11年8月

中京大学図書館学紀要 4：昭58年2月+

中央大学社会科学研究所研究報告 1：1983+

独協大学外国語教育研究 1-2：1982-1983+
元老院会議筆記(明治法制経済史研究所) 1-28，
：明9-明20(昭40-昭58刊)+

岐阜大学教養部研究報告 19：1983+

[法務省]法務総合研究所研究部紀要 1960(2)，
1962-1964，1965(2)，1966-1967，1968(1)，
1969，13-19：1970-1976，21：1978

[法政大学]法政史学 15-17：昭37-昭40，21-
26：昭44-昭47，28-35：昭51-昭58+

インベストメント(大阪証券取引所) 36巻4号
(218号)：昭58年8月+

情報処理学会論文誌 25：1984+

[神奈川大学]人文研究 86-87：昭58+

関西医科大学教養部紀要 5，9：1974，1982+
建設物価建築費指数(建設物価調査会) 1-3：
昭58年7月+

金鯨叢書一史学美術史論文集一(徳川黎明会) 1
-9：昭49-昭57

気象(日本気象協会) 312：昭58年4月+

[国学院大学]日本文学論究 43：昭59+

公証：日本公証人連合会機関誌 67-68：1983+
[熊本短期大学付属]社会福祉研究所報 4-11：
1975-1983+

松阪大学紀要 1：昭58+

[日本建築学会北海道支部]建築作品発表会作品集
2-3：1982-1983+

大林組技術研究所報 1-26：1966-1983+

[帯広畜産大学]農業経済研究報告 1-2：1983
+

大手前女子大学論集 18：1983+

歴博(国立歴史民俗博物館) 1-3：昭58-59+
立法と調査(参議院常任委員会調査室) 115：昭
58年4月+

[星稜女子短期大学]星稜論苑 1-4：昭56-昭
58+

雪氷(日本雪氷学会) 29-45：昭42-昭58+

司法省日誌 復刻版 日本史籍協会編 1-5：
明6年-明7年+

宗教法(宗教学会) 1：1983+

村落社会研究(村落社会研究会) 1-17，19：
1965-1981，1983+

シュトイエル(日本税法学会) 353：昭58年4月
+

東京商船大学研究報告 人文科学 34：昭58+

東京商船大学研究報告 自然科学 34：昭58+

Analerta Husserliana: the yearbook of
phenomenological research. London.
8-9：1979，11-16：1981-1983.

Gewerkschafts Zeitung: Organ des Allge
meines deutschen Gewerkschaftsbandes.
Berlin. 39-43：1929-1933.

Journal of European economic history：
Roma. 2-10：1973-1981

Journal of sound and vibration.: London. 92
：1984+

Literature(Reprint, 1982): London. 1-9
(No. 1-221): 1897/Oct. 23-1902/Jan. 11

Die neue Gesellschaft: Bonn. 1-28: 1954-
1981

Public administration review. Washington,
D. C. 1-41: 1940/41-1981, 43(3): 1983
/May-June+

Statistical abstract relating to British
India: (Microfiche ed.). London. 1-36:
1840/1865-1891/1901



アマデウス ♪♪♪ ♪♪♪の冥想 (第1回)

たぐいまれな贈物
—モーツァルト以前のモーツァルト—

「—われわれの耳には美しすぎる。
それに音符が多すぎるようだね、
モーツァルト君。
—陛下、ちょうど必要なだけの
音符でございます。」

モーツァルトの音楽の美しさはどこからくるのだろうか。人はその光源をみい出しかねて、神童とか天才の代名詞を当てはめて来た。しかし、彼の音楽の美しさを形づくった要因があるはずだ。昨年出版された『モーツァルト事典』（冬樹社）の家系の中にその光源を求めてみた。

モーツァルトの父・レオポルトの父方の祖先に当る「モーツァルト家」は十五世紀には南ドイツのシュヴァーベン地方の農夫であった。十六世紀やがてその一族は当時フッガー家が栄華を誇ったアウグスブルクに出て“マウラーマイスター”つまり石工職人の親方となった。その後、一族からは彫刻師や彫像師となる者も出、レオポルトの父親は製本師となった。一方、レオポルトの母方の祖先に当る「ズルツァー家」は代々“ウェーバーマイスター”というから織師の親方であった。

他方モーツァルトの母・アンナの父方の祖先はオーストリアのザルツブルクに近い地方に住む庭師で、アンナの父は楽士をしながら大学を出て官吏のような仕事をしていた。又母方の祖

先「アルトマン家」は古くは菓子職人やろうそく職人となる者が多く、アンナの祖父は大学を出て法学者となったようだ。

かくて、モーツァルトの音楽の美を構成する要素を彼の家系の中に見い出せそうに思われる。父・レオポルトの祖先「モーツァルト家」からは“彫りの深い造形性”を、同じく「ズルツァー家」からは“音をことほぐ繊細な色調性”をモーツァルトは受けついで。他方母・アンナの祖先「ペルトウル家」の“音階の法則的な簡潔性”と「アルトマン家」の“ユーモアのあるリズムカルな快活性”とをモーツァルトは受け継いだのではない。

心理学者ユングは「ある子供の資質に一番大きな影響を与えるのは、その一族の本家の祖父母、曾祖父母、あるいはもっと朔る世代であって、彼等は数世代に渡って子供に与える贈物をゆっくり用意する。」という。かくてモーツァルトも又彼の祖先から“たぐいまれな贈物”をゆっくりと受けとったといえる。ドイツ人の美とオーストリア人の美の合流点がアマデウス・モーツァルトその人だった。

この合流点に我々はモーツァルトの“民衆音楽家”としての像を予見することが出来る。「モーツァルト」の語源は定かではないがその祖先の職業〈Maurer〉石工職人と〈Maure〉モール人（スペインのアラビア系アフリカ人）、それにスペイン語のこれに近い Mozarabe を較らべると興味深い。 (乙)

(今回は「音楽の師としてのヨーロッパ旅がモーツァルトの学校」)

■編集後記

「だより」の編集をはじめて早や6年、22号を発行しました。この間一度の休刊もなく続けてこれたのは読者諸兄の励ましがあつたからこそ。

それもさることながら、毎号無理な執筆依頼に心よく応えて下さった諸先生のお蔭でもあると編集委員会一同感謝しております。

それにもう一つ、毎年編集委員を交代で担当する活力が新しい紙面構成の礎えになっていることもたしか。今年紙をカラーにしたのもその一つの工夫です。

北海学園大学附属図書館報

図書館だより

Vol.6 No.1
(通巻 89号)

北海学園大学附属図書館

一本 館一

〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

電話(011)-841-1161(代表)

内線、総務係272 閲覧係274-275

図書係273

—工学部分室—

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

電話(011)-561-2911(内線)64